

書名： **絵画論**
描くことの復権
著者： **宇佐美圭司**

出版社：筑摩書房
出版年月：1980年4月
総ページ数：206ページ



推薦者
野崎 窮
鳴門教育大学大学院教授
芸術系コース（美術）

～表現すること～

20数年前、埼玉の山奥での彫刻制作を中軸にした生活から、鳴門教育大学という教員養成機関での生活が始まり、現在に至っている。大学に勤め始めて最初におこなったことは、附属図書館に行き美術及び美術教育に関する図書で興味がわいたものを読むことであった。具体的な目標として、学術的な環境に早く慣れることと、自身の彫刻論をまとめるために、他の作家のものを読んでみたいと思ったからだ。

その中で一番気になった本がこれから紹介する本である。実は本当に著者の意図するところを理解しているかは今でも自信がない。ただ、現代に生きる作家として思いあまる感情・情念で彫刻を創ることや、あるいは自然が美しいことに感動してその美しさをそのまま素直に表現することに疑問を持っていた自分にとって、共感できる考えがこの本にあった。そして、その後の制作活動に影響を与えている。

著者は画家であり、美術大学の先生でもあった。1940年に生まれ、2012年に亡くなっている。1972年にヴェネチア・ビエンナーレに参加する等の活躍があった。尚、著書はこの他にも「20世紀美術」等がある。戦後の日本における重要な画家の一人であると思う。

この本を読んで考えたことは、表現することにおけるものの「見方」、あるいは「考え方」である。美術の歴史は様々な変遷があり、現代の多様な表現に至っている。その先行研究から、お前の行っている表現はどのような価値があるのだと間接的に問われているような気がした。その意味でこの本は、私にとって一人の教師であると思っている。

